

## 無名草子

亞細亞大学・改

## 【要旨】

歌を詠み、物語を撰び、情趣を好むのだけがいいというわけではない。歌の道に優れているというだけではだめである。箏の琴は一般的である。琵琶は弾く人も少なく、聞いてみたい。博雅三位は琵琶に優れていたが、兵衛内侍という人の琵琶は当時としては最高のものであった。

## 【解説】

問1 C

問2 イ

問3 1 連体形 3 連体形 4 未然形

問4 5 連体形 9 已然形

問5 2 副助詞・程度

問6 7 助動詞・過去・連体形

問7 10 動詞・ラ行下二段活用・連用形

問8 5 奥ゆかしく、聞いてみたい感じがします。

問9 6 イ 7 兵衛内侍の琵琶を人々がほめたこと。

問10 8 オ

問1 「めでたし」の意味には、①すばらしい、②祝賀すべきだ、

③愚かである、などの意味がある。「こ」では①。こは、「よからぬ爪鳴らし」「なべて耳馴らし」であるから、「いと口惜しきなり」

分なくらいでは、はなはだ結構であるといえましようか、いや、いえません。その中でも箏の琴は、女のたしなむことと思われて、親しみ深く情趣のある音色であるが、身分の低い新参の女房や、童、侍などまで、おおよそ下手な爪弾きをして、一般に聞き慣れたものにしているのが、まことに残念である。琵琶は一般に弾く人が少なく、まして女などは、たまたま習っているのを聞くのもまことに結構で、奥ゆかしく、聞いてみたい感じがします。

博雅三位が、逢坂の関へ百夜参りに行って、蟬丸の手から（琵琶の秘曲を）習い伝えなさったらしいのは、考えてみてもまことに珍しく結構な話だが、兵衛内侍といった琵琶弾きが村上天皇の御代の相撲の節に、（名器の）玄上をいただいて弾き申し上げたが、（その音色が）陽明門まで聞こえたなどというのは、まことに結構なことだ。「あの博雅三位でさえこれほどの音色はお弾き出しにならなかつた」と、当時の人が褒めましたというのは、女の身としては珍しいことでござります。

歌などを詠み、すぐれていて、人に褒められる例は、昔も今もたくさんある。しかし、この琵琶の話は、まことに珍しくうらやましいことでございます。

## 【解説】

問1 無名草子：作者は藤原俊成（女）という説もあるが不詳。建仁（一二〇〇）ころに成立したと思われる。『源氏物語』の評を中心として、物語・歌集・法華経などに関して、老尼と女房たちが対話する評論。

古代文学研究の資料としても価値がある。

(とても残念)という気持ちになる。

問2 「なべて」は副詞で、「一般に」の意。「まして女などは」琵琶を弾く人が少ないと続く。したがって、「少ない」という意味となる。

問3 ラ行変格活用の動詞「はべり」の活用は形容詞・形容動詞・助動詞にも関係するので確実に覚える。

問4 「心にくし」（奥ゆかしい）、「奥ゆかし」（～したい）は重要な単語。特に「奥ゆかし」は、「見たい・聞きたい・知りたい」などの願望を表すので、前後関係で判断する。

問5 「心にくし」（奥ゆかしい）、「奥ゆかし」（～したい）は重要なものを類推させる（～サエ）、②最小限の限定（セメテ～ダケデモ）の意となる。

問6 副助詞「だに」は、①程度の軽いものを示してより程度の重いものを類推させる（～サエ）、②最小限の限定（セメテ～ダケデモ）の意となる。

問7 『俊頬脣脳』（源俊頬）、『古來風体抄』（藤原俊成）、『無名抄』（鷗長明）、『近代秀歌』（藤原定家）、以上は歌論。『閑居友』（慶政）は説話集。

## 【注意したい表現】――反語表現

反語表現は、「～だろうか、いや～でない。」と口語訳するのが原則である。

(1行目)……色を好むのみやは、いみじくめてたかるべき。

(2行目)……いみじくめてたかるべきことやははべる。

↓反語の意味を表す係助詞「やは」

## 【解説】

必ずしも歌を詠み、物語を撰び、情趣を好むのだけが、はなはだ結構であるといえようか、いや、いえない。何事にも、歌の道に十

## 第2日 おらが春 京都産業大学・改

## 【要旨】

奥州への行脚を志し、姿は西行に似ているものの、心は程遠い。そのまま旅を続けるが、六十歳を超えた我が身では、もう故郷に帰ることはないだろうと思うにつれ、心細くなつてくる。足も進まぬままに、故郷のことを思い、故郷に心引かれる俳諧を読む。

問1 1 イ 4 ウ 7 ア  
問2 2 エ  
問3 3 ア  
問4 4 四月  
問5 5 「杖をつく」と「つくづく思ふ(う)」とをかけている。  
問6 6 坂  
問7 7 助動詞・れ 終止形・る 意味・自発  
問8 8 季語  
問9 9 イ

## 【解説】

問1 4 仏門に入るこことを髪をおろすということだから、「剃髪」ともいうが、一度仏門に入った人が俗世間に戻ることは「還俗」という。本文では一度仏門に入っている。7 「一期一会」

(生涯に一度限りの出会い)という言葉を連想すればよい。  
問3 「墨染」は僧の着物あるいは喪服のこと。雪の白と墨染めの黒を対照的にとらえている。